

興国寺本堂

本堂（法堂）は興国寺の精神的な中心であり、仏陀である釈迦牟尼を祀っています。本堂は入母屋造りの二層屋根、装飾瓦、軒を支える複雑な木製の腕木が特徴的です。現在の建造物は 1797 年に建てられました。

堂内には金色の本尊釈迦牟尼像をはじめとする数多くの仏像が安置されています。この像は蓮の台座に座しており、仏教の守護者である四天王の像が両側に並んでいます。天井には本堂を守る龍が描かれています。

本堂の裏手から瞑想道場である禅堂へ回廊が続いています。そこから開山堂まで第二回廊が続きます。開山堂には日本における禅宗の普及に身を捧げた僧侶心地覚心（1207～1298 年）が祀られています。覚心禅師は 13 世紀後半の大部分にわたって興国寺の住職を務めました。覚心は後醍醐天皇（在位 1318～1339 年）によって死後に与えられた称号である法燈円明 国師（完全に目覚めた法灯の国師という意味）とも呼ばれています。禅師の埋葬地の上に建立された開山堂には覚心の木造像が安置されています。現在の建造物は 1823 年に建てられました。

禅堂と開山堂は非公開で、本堂は寺院行事の時のみ公開されます。正面扉の羽根板の隙間越しに本堂内部を覗き見ることができ、境内を散策しながら 3 つの堂の外観を眺めることができます。